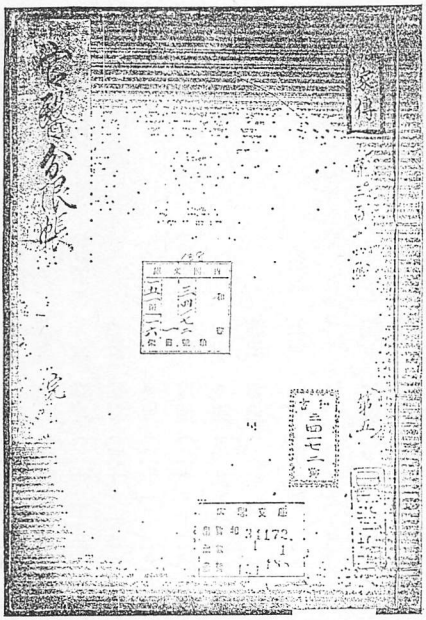
江戸幕府の医療制度に関する史料（四）

―文化八年六月禄『官医分限帳』―

香取　俊光

本誌第三五巻第三号（一九八九）に国立公文書館所蔵の元禄十三年（一七〇〇）『侍医分限記』を紹介した。今回は同館所蔵の史料の中から文化八年（一八一一）六月禄『官医分限帳』（請求番号一五一～一八八）を紹介する。

江戸幕府の医師を含めた家臣の系図は、『寛政重修諸家譜』によって知れる。しかし、寛政十一年（一七九九）に家譜・家伝の提出がされているので、その後は不明である。文化八年六月禄の『官医分限帳』は、この空白の部分を埋められる貴重なものである。



本史料は、表紙と墨付き十一丁半の小冊子で、医師以外の者は見えない。内容は、医師の名前が「イロハ」順に並び、知行（所領）または蔵米（給料）の高と医療科目の内、本道（内科）・外・鍼・小児・口（歯）・眼・痘の七科の別が記されている。人数は本史料巻末集計では、総人数一九〇人、内四五人が知行取り、一四五人が蔵米取りである。しかし、筆者集計では総人数一九一人で、内三七人が知行取り、一五四人が蔵米取りである。医療科目別の内訳を見ると、本道一二一人、外科二六人、鍼科一四人、小児科一八人、口科六人、眼科五人、痘科一人である。

以下に原文を紹介していくが、字体などは史料に倣い直し、（　）内は著者の注で、数字は『新訂増補　寛政重修諸家譜』全二二巻（続群書類従完成会、東京）に該当する家系の巻数と頁を示した。

（「　」内表紙）

「官医分限帳　完　」

官医分限録

伊之部

高千弐百石　今大路中務大輔（十一―八八）

高五百石　下総豊田　井関　祐悦（十九―二〇九）

高三百俵　（本家）　井上　玄徴（二十二―三四二）
高弐百俵　井上　玄丹（十九―一三五）
高七拾人扶持　（分家）　井上　泰庵（二十二―三四四）
高弐百俵　生野　松寿（二十―一二）
高弐百俵　伊東　高興（二十一―二九九）
高弐百俵　（痘科）　池田　瑞仙（二十二―二四一）
高百六拾俵　池田　元随（十九―三〇一）
高百俵　池田　雲伯（二十二―二三〇）
高弐百俵　針科　石坂　宗哲（なし）

波之部

高五百石　塙　宗悦（十七―二二六）
高五百石　伴　道興（二十二―二八九）
高弐百俵　秦　寿命院（十―三二七）
高弐百俵　服部　了元（二十―二八八）
高弐百俵　林　長元（二十―一三七）
高弐百四拾俵八人扶持　林　良適（十九―二三三）
高百俵三人扶持　針　畠山　隆川（二十―二六七）

仁之部

高弐百俵　丹羽　好徹（二十二―一一六）
高弐百俵　外科　西　元長（二十二―二〇九）

保之部

高弐百俵十人扶持　口科　堀本　好安（二十―一〇一）
高百俵五人扶持　口　本賀　貞眠（二十―一三九八）

土之部

高三百俵　土岐　長元（十九―一七三）
高百六拾石　土岐　宗意（十九―一七一）
高三百俵三拾人扶持　小　東　宗朔（二十―二四五）

（お之部）

高千石　岡本　玄冶（十―九四）
高三百俵　小　岡　道陸（十七―二二四）
高三百俵弐拾人ふち　岡　道和（十七―二二二）
高三百五拾俵　岡　了節（十九―三九六）
高弐百俵　大八木傳竈（十九―三六六）
高弐百俵　小　小野桃仙院（二十二―二三八）
高三百石　下総相馬郡　小川　千庵（二十―一三四カ）
高三百俵　小　小川　玄孝（二十―一三三）
高弐百俵五人扶持　大渕　元東（二十―一四）
高弐百俵　大石　順成（二十―一二四）
高三拾俵五人扶持　大石　元庵（十九―三九七）
高三百俵　太田　林庵（十七―三三六）
高弐百俵　小　太田　元達（二十二―二三八）
高百七拾俵　岡井　玄斎（二十二―二五九）
高弐拾人扶持　外　岡山（田カ）養仙（十九―一〇五）
高弐拾人扶持　針　小崎　三省（二十一―二四九）
高三拾人扶持　一代御医師並　小野　蘭山（なし）

和之部

高三百俵　針　和田　春長（二十―三四五）
高百俵五人扶持　渡辺　立軒（二十―四四）

加之部

高弐百俵　外　桂川　甫謙（二十一―一三）
高弐百俵　上領（かみりょう）　玄碩（十八―四一八）
高弐百俵　片山　宗元（五―三六七）
高弐百俵　勝本　桃仙（二十二―一〇九）
高百俵十人扶持　眼科　笠原　養玄（十―四五、分家）
高百俵十人扶持　眼　笠原　養泉（十―四四、本家）
高百俵五人扶持　口　兼康栄元（二十二―三四〇）
高百俵十人扶持（分家）　外　川島　宗瑞（十七―二二九）
高拾五人扶持（本家）　外　川島　周庵（十七―二二八）

与之部

高七百石　山城紀伊郡綴喜郡下総香取郡　吉田大蔵卿（七―二二六）
高五百石　弐拾人扶持　下総千葉郡　小　吉田　周竹（七―二三六）
高三百俵　小　吉田　長達（七―二三八）
高弐百俵　吉田　昌叔（七―二三八）
高五百石　余語　良仙（十七―三二七）
高百俵十人扶持　吉益　元周（二十―八四）
高弐百石　下総香取郡　吉田　梅庵（十九―三七八）
高弐百俵　小　吉田　元長（十九―三八〇）
高弐百俵　吉田　元卓（十九―三七九）
高弐百俵　吉田　慎庵（五―二六九）
高弐百四拾俵　外　吉田　自謙（二十二―三五四）
高弐百弐拾五俵　小　吉田　玄庵（十八―三二四）
高弐拾人扶持　針　吉田　秀和（二十二―一〇八）

多之部

高七百石　竹田治部卿（十二―一六七）
高七百石十人扶持　橘　隆庵（二十―三六二）
高弐百俵拾人扶持　多紀　安長（十八―一八〇）
高弐百俵　（本家）　大膳亮好庵（二十―二九〇）
高弐百俵　（分家）　大膳亮玄碩（二十―二九一）
高弐百俵　小　田代　宗三（二十―一三五）
高弐百俵　小　高嶋　良玄（十九―三三七）
高三百俵弐拾人ふち　高木　玄濟（五―四一八）
高百俵十人ふち　眼　伊達　本覚（十七―二二九）
高三百三拾四俵　田村　安栖（十八―一八三）
高百五十俵　田中　俊庵（十九―二六八）
高百人扶持　（本家）　武田　秀安（三―二一一）
高四百俵　（分家）　武田　叔庵（三―二一三）
高十五人扶持　田沢　玄兆（十二―一五五）
高五人扶持　竹内　元英（十九―二八九）
高三拾人扶持御番医師格　田村　玄雄（三）（なし）

曽人部

高三百俵　小　添田　道周（十九―二九五）
高弐百俵　外　曽谷　伯安（十三―三、本家）
高六百三拾石　（外）　曽谷　長順（十三―一、分家）

津之部

高弐百俵　外　津軽　意伯（四）（十二―八一、分家）
高弐百俵　（外）　津軽　玄意（十二―八〇、本家）

南之部

高千五百石　半井大和守（十一―一九二）
高五百石　奈須　玄竹（十八―三〇五）
高弐百俵　成田　活元（十八―三四二）
高弐百俵　長尾　全庵（二十―三八〇）
高三百俵十人ふち　長嶋　元説（二十一―八）
高弐拾人扶持　中川常春院（二十一―三一一）
高弐拾人ふち　中村　玄種（二十―一二六）
高拾人ふち　半井　卜養（二十一―一九）

武之部

高五百石　村田　忠庵（二十―一）
高三百六拾俵　小　村上　良徳（二十二―七三）
高弐百俵　村岡　玄超（二十一―一三五）
高三拾人ふち　外　村山　春堂（二十二―三一）
高弐百俵　養生所付（外）　村山　伯元（二十二―三〇）

宇之部

高弐百俵　内田　玄勝（十六―八〇）
高弐百俵弐拾人ふち　針　上田　東暦（二十―三七一）

能之部

高弐百俵　野間　玄琢（十三―三五〇）
高弐百俵　野呂　元忠（二十二―二〇九）

久之部

高弐千石　武蔵　下野（分家）　久志本左京（十八―一一二）
高三百石　（分家）　久志本主水（十八―一一〇）
高三百石　（本家）　久志本式部（十八―一〇七）
高三百石　常陸築（筑）波郡　栗本　瑞見（十九―三四七）
高三百俵　針　栗本　杉庵（二十二―三九）
高弐百俵　外　栗崎　道枢（二十―三六五）
高弐百俵　熊谷　玄与（二十―二〇八）
高弐百俵十人ふち　久保　元長（二十―七七）

也之部

高八百石　相州高座郡　山田　立長（十九―二八八）
高六百石　谷辺（やべ）　道室（二十一―九五）
高三百俵　小　山添　宗元（二十―一七）
高三百俵　山田　宗圓（二十二―二七六）
高弐百俵　山本永春院（二十二―三五二）
高弐百俵　針　山崎　宗運（二十―一〇〇）

萬之部

高千九百石　曲直瀬養安院（十―九二）
高百六拾俵　曲直瀬寿徳院（十九―四〇〇）
高六百石　針　増田　愛徳（二十一―一二〇）
高弐百俵　松井　長庵（五）（十九―二五九）
高弐百俵　外　丸山　昌貞（二十―六二）
高弐百俵　小　町田（谷カ）　元悦（二十二―二三四）
高弐百俵　外　牧野　升朔（二十二―二八）
高百五拾俵　前田　元長（二十二―二四六）
高百俵五人ふち　眼　馬嶋　瑞伯（二十二―二三四）
高弐拾人扶持　外　増山　養甫（二十一―三三四）

不之部

高七百石　般橋　宗迪（二十一―一六）
高弐百俵　藤本　立泉（二十二―一三一）
高弐百俵　福井　立助（十九―三三三）
高弐拾五人ふち（本家）外　古田　休真（十五―八二）
高拾五人ふち（分家）外　古田　瑞玄（十五―八三）

古之部

高五百五拾石　高麗　雲祥（二十一―四七）
高五百石　河野　良以（十―二二三）
高弐百俵　小　小森　西倫（二十二―三四一）
高弐百俵　小柴　池庵（十八―四〇六）
高弐百俵　小嶋　昌与（十九―三九三）
高百五拾俵三拾人ふち　小嶋　璠庵（十九―二二三）
高弐百俵　小嶋　活安（十九―三九三）

安之部

高三百石　安倍長徳院（十―三九九）
高弐百弐拾俵　外　天野　元昇（二十一―二九二）
高弐拾人ふち（日）安藤　安貞（二十二―八一）
高百俵五人ふち　眼　赤松　長延（二十―四二）

佐之部

高五百石　坂　上池院（五―二六四）
高弐百俵　針　坂　春達（五―二六七）
高弐百俵　坂　真庵（五―二六四）
高弐拾人ふち　坂　玄春（五―二六八）
高四百石　佐合　益庵（二十―三六九）
高三百俵　外　佐藤　京甫（二十―一七一）
高百六拾七俵（分家）外　坂本　養順（二十一―三六九）
高七拾八俵十人ふち（本）外　坂本　養安（二十一―三六八）
高三百俵　針　佐田　玉傳（二十―三九、分家）
高三百俵　針　佐田　玉春（二十―三九、本家）

璠之部

高五百石　木村　簡元（二十一―二一四）
高弐百俵　木村　玄長（十九―二七一）
高三百俵　璠多村安正（二十一―二四六）
高三百俵十人ふち　木下　道圓（十七―二一四）

由之部

高弐百俵　遊佐　九卜（二十一―二一七）
高弐百俵　湯川　安道（十九―二九六）

美之部

高弐百俵　峯岸　春庵（十八―三八七）
高百俵三拾人ふち　町屋敷百俵程　宮村　永都（二十―二六四）
高弐百俵　宮崎　元養（二十二―二三九）

志之部

高弐百俵　外　鹿倉　以仙（二十二―一一二）
高弐百俵　塩田　宗栄（二十二―二六五）
高三百俵十人ふち　渋江　長伯（十―四六）
高拾人扶持　針　嶋崎　栄仲（二十二―一七八）
高弐百俵　小　篠崎　三伯（二十二―二二二）

高弐百俵　小柴田玄泰（七）（なし）

肥之部

高弐百俵　人見高栄（十七―二二〇）

高弐百俵　外廣井宗意（二十―五五）

高三百俵　平井（田カ）道有（十七―二一六）

高三百俵　平井由軒（二十―三六二）

毛之部

高七百石　森宗貞（二十二―八八）

高四百廿五石　森昌益（十八―三〇七）

高三百俵十人ふち　森雲南（二十―八〇）

高弐百俵　森杏樹（十九―一一）

高弐百俵　望月三作（十一―六九）

高百俵弐十人ふち（本家）口　本康碩寿（二十―二一五）

高百俵五人ふち（分家）口　本康寿仙（二十―二一六）

勢之部

高三百俵　千田玄知（十九―一九七）

高弐百俵　千賀道有（十九―三三一）

高弐百俵（本家）外　関本伯典（二十―二八七）

高弐百俵（分家）外　関本伯元（二十―二八八）

須之部

高千五百石（本家）数原通玄（二十―三五八）

高五百石弐拾人ふち　数原宗得（二十―三五七）

高四百石（分家）数原玄英（二十―三六〇）

高弐百俵　杉本忠温（二十―二一八）

高弐百俵　杉浦昌順（二十―三七六）

高弐百俵　針杉枝仙良（二十一―三三八）

高弐百俵　須田昌意（二十―八三）

無印本科

惣人数百九拾（一）人

内　四拾五人（三十七人）　知行

百四拾五人（百五十四人）蔵米

文化八辛未歳六月録

文献および注

（一）石坂家は、江戸中期より幕末まで代々幕府の医員で、本史料の三代目宗哲が著名である。中期よりの家であるのだが、不思議にも『寛政重修諸家譜』には見えない。石坂家の初代は盲人で、検校志米一は石川文荘著『続本朝瞽人伝拾遺』巻之一（筑波大学附属盲学校所蔵）に、

石坂志米一、江戸人、幼而失明、長而業鍼術、嘗遊杉山検校門為高足、元文元年十月十五日、為徳川幕府招列侍醫賜二十人俸、且賜邸於日本橋通四丁目、延享二年五月一日病没、葬深川増林寺、釋謚日壽仙院翁石坂検校鶴翁宗権居士（、点筆者加筆）

とある。鍼の流派は、杉山和一（管鍼）門下であった。『三代関』末（国立国会図書館所蔵）には、

妙観

杉嶋　石坂ニ更　志め一　坊　杉坂　かの一

祖　三嶋　やす一

同（享保十七年十月）廿七日

とある、平曲の流派は妙観派で、師匠は杉坂かの一で、杉坂の師匠は三島安一である。三島の師匠を同書で調べると杉山和一で、平曲も杉山の流れである。検校には、享保十七年十月二十七日になっている。最初杉島を称したが、後に石坂と改称した。『徳川実紀』元文元年（一七三六）十月四日条に、

瞽者杉嶋（のち石坂）検校志米一は西城の針療をつかふまつるをもて。月俸二十口を賜ふ。

とあり、杉島（石坂）検校志米一が西城の治療に当たるので月俸二十口を賜ったとある。すぐこの後の十月十五日条に、

瞽者石坂検校志米一初て拝謁を給ふ。

と、石坂検校志米一が初めて将軍吉宗に拝謁している。『徳川実紀』延享二年（一七四五）七月二日条には、

針科盲人石坂検校志米一没せしが。近き頃召出されしものなれど。しばしば治療奉りしをもて。幼子宗鋏に月俸五口をたまひ。業をつがせしめらる。

と、志米一が没し、幼い子の宗鉄が家を継いだ事が分かる。

(二) 小野蘭山の召出しについては、『徳川実紀』には見えない。『医師改革之留』（国立公文書館所蔵、請求番号二二〇～一一九）の中に次の史料がある。

書抜

寛政十年（一七九八）

十一月

町醫師

小野蘭山

当時小野苓庵家

惣髪ニ而　被召出御扶持方三拾人扶持被下諸国採薬被　仰付之

本文には、「一代御医師並」とあるが、『続徳川実紀』文政十二年（一八二九）十月十六日条に、

番醫小野蕙畝その父蘭山が著述の書籍たてまつりしにより白銀を下さる。

とある、『医師改革之留』の別の箇所には、

曽祖父蘭山　御番醫師

惣髪ニ而　被　小野苓庵

召出御奉公仕候例有之候間相願候

右者曽祖父蘭山者新規被　召出候者ニ而家々例有之候

とも頭冷等之申立も無之者ニ付難成旨可相達候

とあるので、蘭山の子孫も医員を勤めている。

(三) 田村玄雄は平賀源内の師で本草学者としても著名で、宝暦十三年（一七六三）六月二十四日に医師並に召出された。『徳川実紀』同日条を見ると、

医田村玄雄玄台召出されて、生涯月俸三十口を給はり。医員に准じて小普請にせられ。韓種人蔓の事を司どらし

む。此玄雄は、本経の学に長じ。常に諸国を渉歴し。薬材を広くもとめ出し。著述の書も少からずとの聞え有て。こたびかく命ぜられしなり。

とある。同七月二十八日条では、

小普請医田村玄雄玄台初見し奉る

と、将軍家治に初見した。明和四年（一七六七）の『武鑑』に、

小普請医師　　勤仕並

朝鮮種人参製法御用ニ付手伝頭取

二人手伝廿人　宝（暦）十三ヨリ　　田村元雄

父元雄製法手伝　　田村元長

とある。その日記に草野冴子他校訂『田村藍水・西湖公用日記』（史料纂集、続群書類従完成会、東京）がある。

（四）津軽意伯の祖先で分家三代目意伯健雄（たけお）について、『医師改革之留』の中に次の史料があるので参考に供する。

書抜

元文五申年（一七四〇）

奉願候覺

御番外科　　津軽意春

私儀若年より頭瘡相煩申候繁々月代仕候得者相券頭痛強仕気分迄相勝不申候就中去秋より別而再發仕頭痛強月代難仕御座候故今以引込養生仕候此節気分不快罷成候得共月代仕候ハヽ又候再發可仕躰ニ御座候間可相成儀御座候者有髪ニ罷成相勤候様ニ仕度奉願候以上

三月　　津軽意春

付札

可為勝手次第候

右付札之通達之

（五）丸山昌貞について、『医師改革之留』の中に次の史料があるので参考に供する。

書抜

元文五申年

私儀頭冷仕候為保養可相成儀御座候ハヽ惣髪撫付ニ仕度奉存候依之申上候以上

三月　　丸山昌貞

付札

可為勝手次第候

右付札之通達之

（六）福井立助について、『医師改革之留』の中に次の史料があるので参考に供する。

書抜

弘化四未（一八四七）

正月　　小普請組

（「　」内朱書）　戸川因幡守支配

「惣髪」　　福井立助

「当時御番医師相勤居候者」

御番医師被　仰付之

(七) 柴田玄泰については、『徳川実紀』天明四年（一七八四）十一月廿九日条に、

市井の醫茨木長宣某。柴田元養某。（中略）各醫術精研するよし聞しめされ。拜賜給ふべしと仰付らる。

とあり、この後翌月の廿二日条に、

寄合醫吉田意安法印宗澤が子式部卿宗惜をはじめ。初見するもの十三人。

とあって、この日初めて将軍家治に拝謁し御目見え医師となったと考えられる。享和元年（一八〇一）四月廿五日条に、

さきに謁見をゆるされし醫柴田元養某。あらたに召出され禄二百苞をたまひる西城奥醫となり元泰と改む。

とあり、同年十二月十六日条には法眼に叙された記事が見える。

(補注) 本史料に登場する幕府の医員に関係するものに、小曽戸洋『都下　医家名墓散策』（『漢方の臨床』）の一連の研究がある。野呂元丈（『同』三五―三、一九八八）、奈須恒徳（『同』三五―四）、杉本忠温（『同』三五―六）、坂盛方院～吉田浄元・浄友（『同』三五―八）、内田宗春一族（『同』三五―一〇）、吉田意安（『同』三六―四、一九八九）、吉田宗活（『同』三六―六）、数原宗達一族（『同』三六―七）、岡甫庵（寿元）（『同』三六―八）、喜多村直寛（『同』三七―三、一九九〇）、幕府医官　船橋氏（『同』三七―七）がある。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室客員研究員）